2026 年３月 22 日（大斎節第５主日、Ａ年）
メッセージ
「死ではなく、命にとどまれ」
（ヨハネによる福音書11：１-44）

司祭ヨセフ太田信三

マルタも、マリアもイエスを愛し、信じていました。そしてイエスも、マルタ、マリア、そしてその兄弟ラザロのことを愛しておられました。しかし、いざラザロの死という現実に直面した時、姉妹の「信じる」ということは崩れてしまいました。彼女たちは今日の福音でも、イエスを最大限敬っています。しかし、イエスが人に命を与えることができるということまでは信じていなかった。いや、もしかしたら信じていたのかもしれません。しかし、愛する兄弟の死という現実に直面し、見えない神の力よりも現実の悲嘆が勝ってしまったのかもしれません。「神でも無理だ」と諦めてしまったのです。事実、その気持ちは「終わりの日の復活の時に復活することは存じています。」というマルタのセリフに表れています。確かに信じています、けれども、この現実は変えられないでしょう、とマルタは言っているのです。兄弟の死という現実の前に、信じることが出来ない。人間の信仰の限界をありありと見せられるような、何ともリアルな場面です。

マリアも人々も同じです。死という圧倒的な出来事の前では、イエスですら無力であると思っています。「盲人の目を開けたこの人も、ラザロが死なないようにはできなかったのか」と彼らは言います。先主日の福音で盲人の目を開いたイエスの業を見ていても、聞いていても、「死者をよみがえらせる」などということは信じることができないのです。イエスはこの人々の姿を目の当たりにした時、心に憤りを覚えられました。イエスは何に憤りを覚えられたのでしょうか。まず、死の闇の中で信仰を失ってしまう人間の姿に怒られた、と読むことが自然です。しかしそれよりも、イエスの憤りは人間から神を信じる心を奪うものに対してのものです。つまりイエスは、「死」に対して憤られたのです。人々から信仰を奪ってしまったのはラザロの死です。この人間の死に対する無力感と、神への不信仰にこそ、イエスは憤り、挑戦し、ラザロを復活させるのです。

これはヨハネによる福音書における最後の奇跡です。ここからイエスの歩みは、十字架上の死へと急激に加速します。イエスの憤りは、人間の不信仰への憤りであり、死への憤りでした。しかし、そればかりではなく、自分自身がいよいよ向かおうとしている十字架上でのご受難への苦しい思いもあったに違いありません。そこに思い至る時、私たちはイエスのご受難を見つめなければならない、と強く自覚します。なぜなら、イエスはご自分の死によって、死に打ち勝たれたからです。イエスの死への憤りは、イエスのご受難によって成し遂げられる、死への勝利へと向かうのです。しかし、マルタやマリア、ラザロの死に立ち会った人々がそうであったように、死に留まるならば、私たちは、神のもとにある、生も死も超えた世界に生きることはできません。イエスはその人間に向かって、「私が身をもって示すから、だから、死に留まるな！」と叫び、「命に留まれ！」「私に留まれ！」と呼びかけておられます。